神はいないと言う日本人は間違っていない

2015/6/22

西九州伝道所

佐々木正明

多くの現代日本人は、誰はばかることなく、「神はいない」と言います。個人伝道や証をしているときにそのような言葉を聞くと、私たちはハタと困惑してしまいます。このような人たちにどうやって神の救いを伝えることができるだろうか、まず神の存在を納得させるには、どうしたら良いのかと悩んでしまいます。

ところがその一方では、実にたくさんの日本人がいろいろな宗教を奉じ、宗教行事に参加しています。「私は〇〇教の信者です」という人や、神社の行事に夢中になっている人たちに出会うと、またしても、「どうしたら、このような人たちに証をして、天地の創造者の救いを説明できるだろうか」と、タジタジとなってしまいます。

私たちはより効果的に、より大胆に福音を語り、神の愛を伝えていくために、「神はいない」という日本人に、「そうですよね。神なんて、本当は存在しませんよね」ということができます。同時に、何らかの宗教を奉じている人たちや、宗教行事に積極的に参加している人たちに、「あなたたちのやっていることは素晴らしい」と、言えることも知るべきです。

神はいないと平気で言う人たちを、無神論者だなんて思うことはありません。本当の無神論者なんて、日本人には滅多にいるものではありません。何らかの宗教を奉じていて、強い宗教心を持っている人たちを、偶像崇拝の罪を犯しているなどなどと、毛嫌いしたり、軽蔑したり、避けたりする必要もありません。彼らも神の愛の対象であり、救いの対象なのです。

私たちは多くの日本人に論戦を挑む必要はなく、敵対感情を抱くことも不要なのです。むしろ、日本人の宗教意識、宗教観を正しく知るならば、彼らと気持ちを一つにして語ることができるのです。敵対感情や嫌悪感をもって語っていたのでは、神の愛も救いも伝えることはできません。

Ⅰ．　神はいないと言う日本人に向かって

「神はいない」という日本人と話し合うとき、私たちはまず同調しましょう。「そうですよね。神なんて存在しませんよね」と言えばいいのです。多くの日本人が神はいないと言うとき、彼らの言う神、彼らの使う神という言葉の意味が、私たちクリスチャンが理解する神とはまったく異なっているのです。彼らはクリスチャンたちが信じている神のことを「いない」と言っているのではなく、ふつう、日本人たちが言っている「神」なるものは、存在しないと言っているだけなのです。ここを間違ってはいけません。私たちクリスチャンも、普通日本人が言っている神など、本来存在しないと信じているのですから、私たちは同じように信じ、同じ立場に立っているのです。私たちは同じだというところから、話を始めるのが肝心なのです。

一般的に、日本人が「神」と言うとき、三つあるいは四つの異なった神感覚を、区別も定義もできていないままに、その言葉を使っています。これらの異なった神感覚は、それぞれが重なり合い混ざり合っているために、明確な境界線を引くことができるようなものではありませんが、それでもある程度の区分けが可能です。そうすることによって、曖昧な感覚や、そこから派生するさらに「ぼやけた会話」をかなり明瞭にし、実りある結果を期待することもできるのです。

①　八百万の神々と言われる、神々の中でも低位置の神々

日本人が神と言うときは、多くの場合、八百万の神々のことです。日本語は単数と複数の区別がはっきりしませんから、神でも神々を意味することがあります。ただ、多くの神という点を強調するときには、八百万の神々と表現します。

日本人の通俗的信仰、あるいは神道の通俗的な神観念では、人間より何かの点で優れているものは、なんでも神になり得ます。筆者が幾度も語ってきたように、「かみ」の本来の意味は、「うえ」に過ぎません。普通の人間よりどこかが優れていれば、神として崇められるのです。山や海や川あるいは草や木や岩などの自然物から、動物に至るまで、あるいは死んだ人間はもとより、生きている人間さえ・・・・、極めて軽く神とされることがあります。

この神感覚は、しばしば簡単な礼拝の対象物、いわゆる偶像を持ち出してきます。時には人間より優れた何ものかを思わせる形、あるいは人間の望みを象徴するにふさわしい姿をした、石や木などの自然物であったり、自分たちで作り出した像であったりします。こ

れは、神に似せて造られて神を知っていたにもかかわらず、罪のために神から追放され悪魔の支配下に陥ってしまった人間の、おろかで虚しい努力ということができます。神の記憶、神意識、あるいは神への感覚の希薄化に、人間自身が恐れを感じて、なんとか目に見え手に触れることができるもので、薄れ行く神の姿を補おうとしているのです。

このような神感覚の神々は、人間の日常の願望、切実な願いから出ているものが多いのが特徴です。中でも、人間の生殖に関わるものが多いようです。男女の生殖器や女性の乳房をかたどった偶像、あるいはそれに似た石木を偶像としているものは、全国各地に点在していますし、男女の営み自体を刻み出して拝んでいる場合もあります。水源の神、漁の神がひっそりと祀られていることもあります。このような神々の礼拝は、ふつう、せいぜい小さな祠を建てたりしめ縄を張ったりする程度で、多くの人々の礼拝を期待する意図もなく、少数の人々に静かに祀られているものです。

多くの日本人は、このたぐいの神々に頼らずにはおられない人々の、弱さと宗教心は受け入れます。ただしそのような信仰自体は、「良識と科学的分別」をもって、内心、バカバカしいものとして退け、「神はいない」というのです。日本人が「神はいない」と言うときの神は、多くの場合このような神なのです。ですから私たちクリスチャンも、彼らにまったく賛同して、「神はいない」ということができるのです。神なんぞいないのです。

しかし大切なのは、このような神々を拝む宗教心です。それを責めたり嘲笑したりしないことです。神ご自身が、間違うことなどありえないほど明確に、ご自分を現して導いてくださっていたイスラエル民族が、その神を裏切って偶像礼拝に走るのとはわけが違うのです。むしろ、日本人の強い宗教心を素晴らしいものとして受け入れ、そこから、彼らも非常におぼろげながら持っている、天地の創造者の存在に対する本能的意識を、みがいて上げることが大切なのです。

赤ちゃんが乳に吸い付くのは生まれ持った本能です。この本能がなければ赤ちゃんは育ちませんし、育てられません。赤ちゃんが間違って何か他の物に吸い付いたとしても、叱ることはありません。乳首を口の近くに持って行ってやると、ちゃんと乳首に吸い付くのです。日本人が、たとえ何であれ拝もうとしているのは、赤ちゃんが間違ったものにでも吸い付くのと同じ、本能によるのです。神に似せて造られたという事実によるのです。間違いを正すあまり、本能まで否定してはならないのです。

② 八百万の神々と言われる神々の中の高位置の神々

日本人の意識にある神の第二は、①で取り扱った神と基本的には同じですが、少しばか

り程度が高く、小さくても神社があり、より多くの人々に祀られる神々です。もっとも普通に見られるのは、氏神と言われる小さな地域共同体の神です。それに仏教が混淆（こんこう＝異なったものが混じりあう）してできた鎮守の神も珍しくありません。さらに、それぞれにいわれや由緒や歴史を背後にもつ、良く知られている大きな神社です。多くは歴史に認められている人物を祀ったり、日本の神話に登場する神を祀ったりしています。

その上位にあるのは、出雲大社や神宮（伊勢神宮の正式な名前）などの、巨大な建築物を伴う神社の神々です。ふつう、出雲大社と伊勢神宮は同じ神道でも異なった系統と考えられています。出雲系は有史前に日本に渡来して定着した民族の神道で、大国主命（大黒様）を主神としています。伊勢神宮は多分その後に入ってきた民族の神道で、降臨系の神社として天照大神（太陽の女神）を主神とし、皇室にかかわるものと考えられています。この二つの民族の間に激しい争いが起こり、後から入ってきた民族が勝利をして、天皇につながる最上位の神社とされたといわれています。ただ現実には、征服された出雲系の神社の方が圧倒的に多いため、その理由が様々な憶測を呼んでいます。いずれにせよ両方とも、自然物崇拝から生まれた神道であると考えられていますので、素人には区別がつかないほど混合して存在しています。

多くの日本人は、神社には二つの系統があることも知らないままお参りし、厳かに祈りを捧げているのですが、その同じ日本人が、神はいないと平気で言うのです。これらの神社は日本人の宗教心の表現ではあっても、そこに神がおられるとか、そこに祀られている神が実存するとは考えていないのです。

本当のところ、そのような神社に祀られていたり、ゆかりがあったりする神々が登場する神話などを読み聞きすると、人間世界よりも「おどろおどろ」していて荒唐無稽なのに驚き、やはり「神なんていない」と言ってしまうのです。私たちもこのような「混乱した」日本人の宗教心を理解し、「神なんていない」という日本人に、同意してあげなければなりません。

特に大切な点は、これらの神社には礼拝の対象となる偶像が、普通存在しないという事実です。小さな祠や社には、仏教の影響もある民間信仰のために、偶像が安置されている場合も少なくありませんが、より多くの人々に認められ、大きな構造物を構える神社などには偶像は存在しません。

その代わり、祭儀の中心となる「御神体」というものがあります。ただしこれは、礼拝される「神」そのものではなく、「神」を象徴する物体で神の依代（よりしろ＝宿るもの）とされるものです。普通の日本人が、自分の信仰心、宗教心の対象と感じているのは、あ

くまでも目に見えない霊的な存在、自分が本能的に心の奥深くに感じている存在であり、「神」ではないのです。私たちがこのような日本人と語り合うとき、彼らが密かに心の奥深くに感じている存在を、もう少し明瞭に意識できるようにしてあげることこそ、肝心なのです。

ここでもまた、目に見えない存在を目に見えないままに礼拝する、日本人の宗教意識を認め、大いに賛同してあげなければなりません。御神体と偶像とを混同してはなりません。この御神体は、神がイスラエルの民に契約の箱に収めるようにお命じになった、品々に似た役割を果たしているといえますが、日本人の場合は次に取り扱う、汎神論的な感覚に通じています。

③　すべての自然物の中に潜んでいる神

日本人の宗教意識のもっとも底辺にある意識は、すべての自然物の中に、「神」と呼ぶことが出来るかどうかは不明だけれど、それ以外に言葉がない、霊的な存在がひそんでいるという感覚です。これが変遷して、巨岩や巨木にしめ縄を張ったり、ひっそりとした深山の谷間や、白波の打ち返す岬に祠を設けたりする通俗信仰にもなっています。その一方では、あくまでも、人間の五感では感知も察知もできない「なにものか」として、「神なんていない」という人たちの心にも荘厳な意識として潜む、消し去ることのできない信仰心ともなっています。

日本人の信仰心の極めて明白な点は、天地万物を尊いお方の潜むもの、あるいは潜んでいる尊いものの現れと見る、汎神論的な感覚です。この尊いものを、多くの日本人は「神」と呼ぶことさえよしとしないのです。神はいないのです。いるのは、いるという言葉さえ使えない、「おわしますお方」なのです。日本人はこの「おわしますお方」を心密かに感じ、その感覚、その宗教心を大切にしているのです。

ただし、その宗教心をどのように表現したらよいのかはよくわかりません。そのおわしますお方がどのようなお方なのかさえも、わからないのです。そこで、そのおわしますお方を象徴する依代（よりしろ）、御神体を作って、それを象徴として祀るのです。それでいながら、御神体を礼拝の対象にすることはないのです。それが一歩間違えば、偶像礼拝に陥った民間信仰としての神道、八百万の神々の神道になるわけです。

ですから、普通、神道という言葉にはこれらの異なった概念が重ね合わされ、混ぜ合わされて含まれていますので、非常に曖昧になるのです。この曖昧さは、一方では他宗教に対する寛容さ、あるいは鷹揚な態度となって現れます。神道的感覚では、神道の信仰さえ

否定しなければ、どのような宗教でも受け入れることができるのです。「分け入れる麓の道は多けれど同じ高嶺の月をみゆらん」という、仏教の高僧の歌が、神道的な日本人の感覚を良く表現していると思われるのです。すべての宗教は、この限りなく尊い、名前さえ付けられない高貴な存在の、多種多様な現れであると見ることができるからです。

私たちクリスチャンは、このような汎神論的神道をかなりの範囲で認めることができます。私たちの創造主であるお方は、本来、日本語の「神」という言葉に制約されたり定義されたりできるお方ではありません。あくまでも、物質の次元を含めてあらゆる次元を超越する、見ることも触れることも出来ない、また考えも及ばないお方です。すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられ、すべてのものを内に収めておられるお方なのです。汎神論を反キリスト教的だと敵対意識を持って接するよりも、聖書もないのに、よくここまで神の本質を感じ取っているものだと、肯定的に捉えて接する方がよほど良いのです。

日本人が心の奥に潜めている神観は、私たちの創造主に非常に近いものです。西洋人は聖書を読み、神についてあれこれと恐れもなく、人間の有限の言葉をもって説明しようとしました。それが「キリスト教の神」です。それは本来目に見えず、手で触れることも出来ないお方を、見たり触れたりすることができる形で表現しようとするのと同じで、偶像につながる危険性を持つものです。本来人間の知的能力では把握も理解もできないお方を、なんとか理解できるレベルに、引きずり落とそうとしているからです。

偶像を作らず、神学も持たない日本人の宗教観、神観の優れたところに気づかなければ、私たちは日本人を見誤ります。また、多くの日本人はそれを本能的に行っているのであって、誰に教えられたのでもなく、自覚さえしていません。ですから、そのあたりのことに触れながら、私たちが信頼している目にも見えず、手で触れることもできず、言葉で説明することさえ叶わないお方について話をすると、多くの日本人が納得してくれるのです。

日本人は神の存在を否定してはばかりません。しかし、この崇高な宗教観をもち、気高くめぐみ深いお方の存在を、本能的に感じ、ありがたいと言って手を合わせるのです。神社で手を合わせても、多くの場合そこに祀られている神や、御神体に手を合わせているのではありまえん。自然の中に満ちておられる方の存在を感じて、手を合わせるのです。

日本人は、パウロがローマ書の第一章で語っている、人類の偶像礼拝の罪に（イスラエル民族の偶像礼拝の罪ではなく）ぴったりとは当てはまらない、唯一の民族かもしれません。本来の神道の感覚では、偶像礼拝は論外だからです。偶像礼拝に陥らなかった日本人の優れた感覚を認め、賞賛するところから始めると、多くの日本人は聖書の神の話も喜ん

で聞いてくれるのです。

④　人間の理解の及ばない唯一の存在者としての神

日本人の多くは、自分たちが拝んでいる神々の存在を否定し、嘲笑いながら、気高く高貴なお方の存在を本能的に感じています。感じてはいますが、その高貴なお方について、あれこれと詮索することはせずに、分からないままにしています。そのために、いざ礼拝しようとすると、神社に詣でたり小さな神々に手を合わせたりすることになってしまいます。

それだけに、質問すると何も理解していない。話し出すと荒唐無稽、説明しだすと矛盾だらけということになります。それでいながら、気高いお方、自分たちを生かし、養い、育て、すべての良いもので取り囲んでいて下さる、恵ふかいお方に感謝する思いを忘れてはいないのです。豊かな自然に恵まれ、四季折々の美しさに囲まれ、澄んだ水が流れ新鮮な緑に覆われた土地に生きる日本人は、その背後におられるに違いない、人知では及びも付かないほど大きく、優しさと寛容さに富むお方を直感的に想定しているのです。

このお方はいったい誰なのか。それを問うことさえ愚かだと感じているわけです。そしてその感覚はまったく正しいのです。私たちクリスチャンでも、神の側からの語りかけがなければ、神についての正しい知識はほとんど持つことができなかったのです。

それでいながら、日本人の神意識にはもう一つ非常に重要な点があります。それは、日本人が心に感じているのは唯一のお方だということです。山の神も川の神も海の神も、大木に潜み巨岩に住まう神も、太陽を昇らせ雨を降ら、作物を育て、生き物を生かして下さる神も、たくさんの神々ではなく、一人の、あるいは唯一つの神だと感じているのです。この唯一の感覚も、ギリシヤ思考によって形成されたキリスト教神学が言うような唯一ではありません。神は唯一であるが三つの神格を持ち、その三つの神格が完全に調和してひとつとなっているという、分析的な唯一ではなく、あらゆるものを包含する唯一と言ったほうが良いでしょう。もちろん、このような表現をする筆者自身がすでにギリシヤ思考に影響された、キリスト教的な基準を持ち込んでいるのは百も承知です。

神道的な神意識、日本人の心の根底にある本能的意識では、気高いお方は一つだとか、三つだとかいう、数の概念を超えているお方なのです。キリスト教の神は三位一体の神であると定義すること自体が、すでに無限の存在の神を、人間の有限の思考の数の概念の枠内に収めることであって、誤っているのです。確かに聖書の神は三つの神格で現れてくださいましたが、三つと限定する理由はないのです。無限の神は数の概念さえ超えておられ

るはずです。

日本人は一方では八百万の神々と言いながら、他方ではこのような人間の有限な理解を超えた、大きな存在を感じているのです。そこに矛盾を感じないのは不思議ですが、少なくても「神はいない」という言い方が、逆に、超越したお方を思わせているのです。

日本人が神道的な礼拝をするとき、礼拝の対象が誰であるかを問うことはまずありません。一段低い神意識で、安産の神、学問の神、農業の神というような神々も存在しますが、そのような神にお願いすることはあっても、「礼拝すること」は滅多にありません。願いを持ちゆく神々ではあっても、礼拝をすべき神々ではないのです。あるいはそのような神々は、気高いお方の象徴的姿の一部のように捉えられています。

ですから日本人は、たとえ祀られている神がなんであろうと、どんないわれがあり、どんな歴史があろうとも、普通はいちいち参拝の仕方を変えたり、それぞれの名前を呼んだりはしません。どの神社でも同じ気持ち、同じ心で参拝するのです。どこの神社で祀っている神であっても、名前もいわれも異なっていても、あたかも同じ神、同一の神であるかのように礼拝するのです。表に出ている神々、祀られている神々は多様であっても、その神々がそれぞれ象徴している霊的実体は、一つだと感じているのです。

これは神道がどう教えているか、宮司たちがいかに説明しているかではなく、一般の日本人の感覚です。つまり日本人は、一般的には八百万の神々を信じているという表現に満足しているというか、「それでもいいや」と思っているようですが、決して納得しているわけではありません。むしろそのような神々を否定し、神社で祀られている神々、大社とか神宮とか言われる巨大な構造物に祀られている神々をも、礼拝の対象としては退けて、むしろそれらの神々の背後におられると感じられる、目にも見えず、手で触れることも叶わず、言葉で説明することさえ憚（はばか）られる、大きな存在を感じて、その存在に手を合わせ感謝の思いを捧げるのです。

「なにごとの　おわしますかわしらねども　かたじけなさに涙こぼるる」という、西行法師が伊勢神宮を訪れたときに詠った歌が、日本人の宗教心をもっともよく表していると言われるのは、非常に意味深いことです。

結び

このように、日本人の神意識、神観は混沌としているように見えますが、ある程度の道

筋をつけることが可能です。そうすることによって、日本人の神意識が少しばかり明らかになり、クリスチャンとしても日本人の宗教心を理解し、福音伝道の手がかりを得ることができます。

八百万の神々を拝んでいる人たちには、その宗教心の深さを褒めてあげ、そこから「友好的に」話を始めることができます。宗教心は人間が人間であることの証明であると、人間は神に似せて造られたという聖書の教えを交えながら、自分も大きな神様、無限の神様、人間をお造りになった神様を信じていると、証してあげましょう。彼らが拝んでいる神々を否定したり卑しめたりする必要はありません。イスラエル人に要求されたのでさえ、初めから他の神々を否定することではなく、ヤーウエの神だけを礼拝することでした。それがやがて、ヤーウエの神以外の神々を神と認めない理解に進んだのです。

八百万の神々を拝んでいる日本人に取って必要なのは、彼らの神々が否定され卑しめられることではなく、天と地をお造りになった大きな力強い神が、いま私たちと共にいらっしゃると知らされることであり、その神に信頼するとどんなに素晴らしいことが起きるかを、教えられることなのです。その神に信頼したら、八百万の神々は不要になり、願いを捧げる対象でもなくなるのです。

私たちはまた、「神なんていない」という日本人に戸惑うことなく「そうですよ。神なんていないんですよ」と同調しながら、彼らが口では否定していても、心では否定しようもなく感じている、「かみ」ではないお方、もっと気高く尊いお方、私たちが、全能者、天地の創造者とお呼びするお方を、紹介することができます。

日本人の偶像を礼拝しない神道的な宗教意識を高く評価し、そこからすべてを超越した栄光の創造者について語ることができるのです。日本人が感じている、すべてのものの中に潜んでおられる唯一の存在者こそ、私たちクリスチャンが礼拝しているお方であると、同じ感覚に立って喜び合うことができます。この方によって私たちは生かされ、永遠の命を与えられ、未来に対する不安もなく、とても喜んでいることを証してあげることができます。

私たちはこれまで教えられてきたように、日本人の神道的宗教感覚を偶像礼拝として蔑み、嫌い、敵対感情を抱いて取り扱うのではなく、天地の創造者であるお方に対する、正しい信仰へ導き入れるための手蔓と考えて、大切に用いて行きたいものです。